慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	巻子装であること： 早稲田大学図書館蔵『新撰菟玖波集〔政弘句抄出〕』をめぐって
Sub Title	A study about the rolled book of "Shinsentsukubasyu Masahirokusyosyutsu (新撰菟玖波集政弘句抄出)"
Author	佐々木, 孝浩(Sasaki, Takahiro)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2009
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.44 (2009.) ,p.139- 157
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	挿図
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20090000-0139

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

巻子装であること

―早稲田大学図書館蔵『新撰菟玖波集〔政弘句抄出〕』をめぐって―

佐々木孝浩

はじめに

稿者は本誌前々輯（四二輯）の拙稿「勅撰和歌集と巻子装」において、勅撰集奏覧に纏わる巻子装写本の実態を調査して、巻子装の権威性を再確認し、改装されたものではなく、制作時より巻子装であった写本の本文は、信頼性や資料性が高いことが期待できることを述べた。また前輯の続稿「勅撰集奏覧本の面影―『新撰菟玖波集』の巻子装本をめぐって―」において、その具体的な事例として、斯道文庫蔵の姉小路基綱筆『新撰菟玖波集巻第一』を取り上げ、その成立の過程や背景を探り、本文の信頼度を確認する作業を行った。この本が奏覧本そのものであると確定することはできなかったが、少なくとも奏覧清書本と極めて近しい関係にあることは証明できた。

本稿は前稿で存在を指摘するにとどまった、やや問題のあるもう一つの『新撰菟玖波集』の巻子本を取り上げて、具体的な検討と考察を行い、巻子装という形態が潜在的に有する資料性の高さについて改めて確認してみたいと考える。

一　もう一つの『新撰菟玖波集』巻子本

前稿でも述べたように、『新撰菟玖波集』という第二代准勅

撰連歌集は、編集や奏覧に関与した人物が書写した伝本が複数存在するのを始め、成立を程経ない時期に書写された伝本も少なくなく、古写善本に恵まれた希有な作品である。とはいえ巻子装として制作された伝本はこれまで確認されていなかったのだが、巻一のみの残欠本ながらこれが市場に現れ、幸いにそれを慶應義塾大学附属研究所斯道文庫の蔵書に加えることができた。『新撰菟玖波集』の編纂過程を伝える『実隆公記』の記述により、その奏覧本は姉小路基綱が清書を担当した巻子装であったことは明らかであった。その奏覧本そのものとは断定できないながらも、形態と書写者を同じくする伝本が現存していたのである。

これとは別に『新撰菟玖波集』にはもう一本の巻子装本が存在していることも、前稿において言及したところである。ただし、この伝本は内題には確かに「新撰菟玖波集巻第一」とはあるものの、その内容は「多々良政弘朝臣」の入集句の付合部分のみを抄出したものであり、『新撰菟玖波集』そのものではないために、前稿では考察の対象としなかった。

この本が単なる抄出本であるならばそれ程驚くに当たらないのだが、江戸時代の鑑定家によってその筆者は『新撰菟玖波集』撰者の宗祇であると極められ、句作者の大内政弘は同集の実質的な発起人にして編集の援助者であった人物なのであり、しかもなんといっても制作当初よりの巻子装なのである。『新撰菟玖波集』研究においても、巻子装という装訂の研究においても、斯道文庫蔵の巻第一にも劣らぬほどに興味深い調査対象であることは疑いないものと思われるのである。そこで本稿ではこの注目すべき巻子装本を取り上げ、装訂と内容の両面から具体的な考察を行って、その資料価値を明らかにしてみたいと考える。

問題の巻子本は早稲田大学図書館に蔵される伊知地鐵男文庫中の一本で、現在同図書館のホームページの「古典籍総合データベース」で高精細のカラー画像を見ることができる。これにより同本の性格の大凡を推測することは可能であるが、信頼性の高い検証を行うためにも、実際に閲覧させていただいて調査したその書誌について以下に整理しておきたい。猶、同図書館での整理書名は『新撰菟玖波集』であるが、ここでは仮に「〔大内政弘句抄出〕」を付して呼ぶことをお断りしたい。また、その巻頭部分の書影を末尾に掲げたので適宜参照いただきたい。

『新撰菟玖波集〔大内政弘句抄出〕』　（文庫二〇・一一）

〔明応頃〕写　一軸　伝宗祇筆

装訂は言うまでもなく巻子装である。表紙は後補の御納戸色地に段亀甲龍文等の緞子表紙で、広げた大きさは二六・四×二一・九糎。八双は金属かと思われる。紐は紫色、軸は牙軸である。偽金紙の題簽（一一・九×一・八糎）に「宗祇法師真蹟菟玖波集」と箱書と同筆で記されているが、「菟玖波集」とあるのは誤りである。見返しは布目金紙。内題は「新撰菟玖波集巻第一」とある。料紙はやや薄手の楮打紙で、現状は裏打ちがなされている。巻首部分に皺が多く、割れ目のような切れ目も存している。紙数は七枚継で、一紙二二行書きが基本だが、第一紙目は右端に余白があり二〇行、第七紙は左端が切断されており二一行である。字面高さは約二一・三糎。料紙の横幅は約四七・八糎程度だが、第一・七紙は約四四・八糎と他より三糎ばかり短い。これとは別に末尾に約九・二糎幅の紙が継がれており、次のような鑑定奥書が記されている。

種玉庵宗祇法師真跡無疑者也

酉霜月上旬　　古筆了伴（「琴山」墨印）

了伴は古筆本家十代目の当主で、寛政二年（一七九〇）に生まれ、嘉永六年（一八五三）七月二十四日に六十四歳で没している。該当しそうな酉年は文政八年（一八二五）・天保八年（一八三七）・嘉永二年（一八四九）あたりだが、干支ではなく酉とみあるのをどう判断すればよいのだろうか。印記は巻首下部に「伊地知氏書冊」（長方黄丹）とあり、見返しには「早稲田／文庫」（長方朱）も捺されている。

古い桐箱に入っており、箱書きは「宗祇法師真跡」とあり、蓋裏には次のようにある。

菟玖波集一巻七枚継

鶯の　　古筆了伴（花押）

鑑定奥書とも同筆であり箱書も了伴で間違いない。また蓋裏左部分の余白には朱筆で、「新撰菟玖波集内／大内政弘句抄出恐ラク宗祇ヨリ政弘ニ進セシ者歟」とあり、更にその下に墨筆で「〔叢〕々堂珍蔵」とある。朱と墨は異筆のように見えるが何れにせよ近代以降のものであろう。

箱の内には包紙が二通あり、一つは大きさ一七・八×四・八

糎ほどの包紙に、「種玉庵宗祇法師　巻物」とまた別筆で記され、中には「新撰菟玖波集（以上小字）／種玉庵宗祇正筆」と書かれた、大きさ一六・三×六・七糎程で四隅を裁ち落とした正筆書が、縦に二つ折りされて納められている。正筆書は了伴父了意が多用した簡略な鑑定書であるが、これも筆跡からして了伴のものであろう。

今一通は大きさ一五・八×二・二糎の包紙に「宗祇外題悟海極」（下三文字は後のボールペン書き）とあり、中に一四・六×一・七糎の布目紙の極札があり、「宗祇真蹟連哥巻　悟海（朱印）」と記されており、裏は白紙である。悟海なる人物については残念ながら知見がない。

以上が同本の書誌であるが、前記のように本文料紙最末の第七紙は他の物より三糎ばかり短く、また最終行の「へや」文字左端が少し切れており、終わり方が不自然になっていて、注意を要する。

この本と前輯で紹介した斯道文庫蔵の『新撰菟玖波集』巻第一の一軸を比較してみると、高さがこちらより五糎ばかり低いのだが、字面高さは約二一・二糎とほぼ同じであることが注目できる。この巻一が奏覧本の書式で書写されているとすると、この本もそれに倣って書かれたものである可能性があろうか。料紙はともに楮打紙であるが、巻一のものの方が白さが目立ち、また一紙の幅も七糎程度短いものとなっている。

猶末尾に本書の翻刻を附したので、適宜参照いただきたい。また利用の便を考え、句頭には通し番号を、句尾には『新撰菟玖波集』の本体の句番号を付した。

二　『新撰菟玖波集〔政弘句抄出〕』の書式

字面高さが格の高い巻子装本とほぼ同じことが確認できたこの本の本文には、どの様な特徴があるのであろうか。そのことを確認するために、『新撰菟玖波集』奏覧本に最も近い本文を有する最善本として知られる、天理大学図書館蔵の明応六年三条西実隆筆本との比較を行ってみたい。実隆筆本は『天理図書館善本叢書和書之部第二十巻　新撰菟玖波集　実隆本』（八木書店、昭50年）の影印を用い、併せて横山重・金子金治郎編『新撰菟玖波集　実隆本』（角川書店、昭45）の翻刻と室町時代古写本九本との校異を参照した。

本書に書かれた政弘の句数は六十四句で、これに前句が附属

するので、総句数は百二十八句となる。ところが実隆筆本等の政弘入数句数は七十五句であり、この内十句が発句で前句を伴わないので、本来であれば百四十句なければならないはずである。前節で説明したように本書の末尾部分には不自然な切断痕があり、末の十二句が欠落しているものと判断できる。これは一紙で納まる数であるから、本来は八紙継であったものと考えられるのである。余白に奥書や識語があった可能性はあるが、現状では確認する術がない。問題の十二句分が古筆切となって現存していないとも限らないので、継続的に探索することは必要であろう。

その百二十八句の残存部分を確認していくと、書式として指摘できるのは、内題に「巻第一／春連歌上」とはあるものの、それ以降は巻数は記されずに、「春連哥下」・「夏連哥」といった具合に部立名のみが明記されていることである。統一性を考えるならば「巻第一」は不要であると言え、それが存しているということは本書が未精選であることを示しているのかもしれない。

またその部立の表記法も、「冬連歌」・「賀連哥」というように部立名に「連歌（哥）」が附随し、同じ部立が巻を越える場合には「上・中・下」・「一・二・三…」等と続くのが基本なのだが、同一巻内に部立が複数存する場合には、第七巻の「賀連哥」と「哀傷」、あるいは巻十八の「神祇連哥」と「釈教」といった具合に、後の部立名に「連歌」が付かないのは、『新撰菟玖波集』とは異なる点である。これは巻数を省略したことに連動して、巻毎の編成が直ぐに判るようにした工夫であるのであろう。

本書に記されているのは、『新撰菟玖波集』にも作者名が明らかにされていない前句を除いて、すべて政弘の句であるので、作者名は巻頭の付句の前に「多々良政弘朝臣」とあるのみで、後はすべて省略されている。また本書の通し番号で44、『新撰菟玖波集』では一三四七の句には左注があるのだが、これが本書では同筆ではあるものの小字で行間に記されている。一旦は不要と判断して書き飛ばしたが、考え直して補入したのであろうか。この点にも草稿性というか、未精選性を認めることも可能であろう。

通し番号124の右肩に「巻頭」との同筆注記があることも注意される。失われている巻十九・発句上の三七二八番句は巻軸なので、あるいはここにも注記があった可能性もある。巻頭句と

巻軸句は勅撰和歌集に準じて考えればやはり名誉なことであるはずであるので、抄出ではそのことが不明になってしまうことから、わざわざ特記したものであろう。

本書の書写態度は基本的に丁寧ではあるものの、やや急いで書かれたような印象がある。このことと、先に確認したような書式の有り様とを考え合わせて導き出されるのは、本書には抄出の為の工夫がなされてはいるものの、草稿性・未精撰性を窺わせる特徴が確認できるので、既に存在しているものを写したというよりも、初めて抄出を行った原本的なものと考えられるのではないかということである。そして言うまでもないが、政弘句のみで一軸を成しているということや、巻頭句の注記も加えられていることから判るのは、本書が政弘の名誉を全面的に打ち出すために制作されているということであろう。

このような性格を有する巻子本が何故に制作されるのかと考えれば、蓋裏に後の朱筆で「恐ラク宗祇ヨリ政弘ニ進セシ者歟」と記されていたように、筆者が極の通り宗祇であるならば、撰集の中心であった宗祇が、撰集の企画者にして庇護者であった政弘に対し、完成報告の意味を込めてその顕彰のために作成したと考えるのが最も自然であろう。

ただし政弘は同集奏覧の明応四年（一四九五）九月二十六日に先立つこと八日の十八日に没しているので、その死後に追善の願いを込めて制作されたものである可能性もある。ともかくも、宗祇から政弘に贈られたと考えることは、例え政弘の死後であったとしても、蓋然性の高い仮説であることは確かなのである。

しかしながらこの仮説には大きな問題が存している。宗祇と本書の筆跡を比較してみると、同筆でないことは明らかなのである。とはいえ、宗祇が誰かに命じて制作あるいは書写させた可能性もあるのであり、仮説が完全に否定されるわけでもない。ともかくも巻子装であるという事実は、政弘に対する贈り物・献上物であることを想定させる十分な根拠になるうると考えられるのである。その送り主が誰であるのかの具体的な洗い出しを行う前に、本書の本文が献上本としての質の高さを有しているのかどうかについて次節で検討してみたい。

三　その本文

本書と天理図書館蔵の実隆筆本の政弘句部分のみを校合して

みると、後述する大きな異同を除いて、本文的には小さな差異を三箇所に確認できる。

通し番号25「いつくのかねそほのかなる声」の「ほのかなる」は、実隆筆本八一一では「かすかなる」で諸本に異同はない。「ほのか」は光や色、香などに用いるのが普通で、音に対しては「かすか」の方が一般的であるとは言える。

しかしながら「ほのかなる声」の和歌における用例は、『正治後度百首』「暁」題の雅経詠「いとふべき契り有りともいかがせん夜ぶかき鳥のほのかなるこゑ」（二六二）や、『永福門院百番自歌合』の十八番右「入がたの月影かすむ山のはに帰る雁さへほのかなるこゑ」（三六八）、あるいは近い時代でも実隆家集『雪玉集』に見える、永正八年四月御月次会で詠んだ「暁擣衣」題歌、「あくる夜の夕付どりがから衣うつにたぐひてほのかなる声」（一三九四）等があり、多くはないものの全く見当たらないわけではない。以上の例は鐘の音を詠んだものではないが、藤原定家の『拾遺愚草』に見える「承久元年七月内裏歌合」における「遠山暁霧」題歌、「ほのかなる鐘のひびきに霧こめてそなたの山はあけぬともみず」（一三八九）や、『続千載集』秋下の九条隆博歌「明けやらぬかねのひびきはほのかにて初瀬のひばら月ぞかたぶく」（題知らず、五一三）、『雅世集』「暁更春月」題歌「ほのかなる尾上の鐘の声ききて霞に遠き有明の月」（二一一）等、鐘をほのかと詠んだ例も少なくないのであって、この句も決して間違いとはいえないのである。

これに対し「かすかなる声」の句も和歌での用例は、『千穎集』「心細十首」中に「とりのみちわづかにかよふおくやまにいりあひのかねのかすかなるこゑ」（八三）と鐘を詠んだものがあるものの、この時代までには他に見出せないものである。またこの他にも鐘の音を「かすか」と詠んだ例は、後鳥羽院御所で催された『院当座歌合正治二年九月』の「暮見紅葉」題三番左の内大臣通親歌、「はつせ山もみぢのそこに聞ゆなり入逢のかねのかすかなる音」（二一一）や、『嘉元百首』後宇多院の「暁」題詠「をちこちの鳥の八声もあけゆくにかすかにかねはうちすさみつつ」（一八〇）等幾つか存するが、決して「ほのか」よりも有力と判断することはできないのである。ささやかな違いではあるが、気になる異同であろう。

もう一箇所は、87「たゝさひしさの山さとの春」の「さひしさの」が、実隆筆本二四九二では「さひしさは」となっており、こちらも諸本に異同はない。「たゝさひしさの」も「たゝさひ

しさは」も和歌の用例は見出せず、連歌的な句であると言えそうだが、連歌の句としては「は」の方が適当であろうか。

両者共に本書の誤写であるとは断定できないのであり、『新撰菟玖波集』諸本中では孤立しているとはいえ、注意が必要な異同であると思われるのである。

残る一つは句中のものではなく、通し番号123「かみのやしろにたかき松杉」に、実隆筆本で「と云句に」と続く部分がないのである。これは『新撰菟玖波集』の巻頭部分の前句には良く見える書き方である。書式の問題と考えるべきでもあり、意味的には問題ないことは言うまでもない。

そして最も注目されるのが、実隆筆本の一四六一、二の「なにをたよりに人を待らむ／たのめしはおもひいつとも雨の暮」の句が通し番号48と49の間に見えず、逆に51・52として「文にむかへるともし火のもと／をとつれにとはれぬ夜はをなくさめて」という、実隆筆本他の諸本に見えない句が存しているという事実である。このようになっているのは、当然抄出の土台となった『新撰菟玖波集』の本文に由来するものであると考えられる。諸本間の本文の共通性が高く、大きな異同は存していない『新撰菟玖波集』にあっては、そのような特異な本文をもった伝本が編纂と同時期に存在していたらしいという事実は、注目すべき重要な問題であると言えるであろう。

前者は抄出者の見落としにより書かれなかったと考えることも可能ではあるが、51・52が存しているのも同じ巻八であることからすると、この事実は編纂に絡む問題であり、両者は密接な関係を有していると考える方が蓋然性が高いように思われる。入集句数やその各巻への配分は十分に計算された上でなされるものであるので、単なる切り出しではその緻密な設計を崩してしまうことになる。そこで切り出しを行いたい時には、同一作者の句の切り入れを同じ巻で行えば、各巻の句数はもとより総入集句数も変化しないので、切り出しの影響を最低限に留めることができるわけである。

そうであるならば、これらの異同は奏覧本成立の前段階で句の差し替えが成されたとことを示していることになる。つまり、本書は差し替えが行われる以前の草稿的な本文に基づいて抄出がなされたと考えられるのである。先に確認した本文の小さな異同も、推敲による改変の差と見なすことも可能であったことは、その推測のささやかな補強材料になるかもしれない。たかが一句宛の出入りとはいえ、これは決して小さな問題ではない

であろう。

このことを証明するために、51・52が『新撰菟玖波集』のどの位置にあったのかを推測し、併せて切り出された理由を考えてみたい。50と53の間にあるのであるから、これらは『新撰菟玖波集』の一四七六と一五四五の間に存在していたことになる。そこから絞り込む為には、句の内容から推測するしか方法はないであろう。

『新撰菟玖波集』各巻の配列を考えるには、奥田勲・岸田依子・廣木一人・宮脇真彦氏編『新撰菟玖波集全釈』（三弥井書店、平11～21）の各巻冒頭に存する「構成と配列」並びに「〈歌材〉目次」項が良い手掛かりとなる。

その巻第八の「〈歌材〉目次」を見ると、一四六〇から一五二〇までが「待恋」の句群であり、さらにその中が素材や状況で細分化されている。51・52の句意からすると、その中でも相応しいのは「待不来恋」句群であると判断され、その一五〇〇から一五二〇までの句を眺めてみると、実隆筆本の一四九九・一五〇〇が表現や内容が問題の句に似通っていることに気付かされる。両者を並べて掲げてみよう。

文にむかへるともし火のもと　51
をとつれにとはれぬ夜はをなくさめて　52

千句の連歌の中に　ふみにおこたる　一四九九
燈のもと　肖柏法師
たのめすはとひゆかむ夜を待ふけて　一五〇〇

特に前句の共通性の高さは一目瞭然である。この一四九九・一五〇〇の前後に51・52が位置していたことはほぼ確実であろう。この両者が続くと内容的に変化に乏しいと考えられて、政弘句が切り出されることになったと考えるのが最も穏当なのではないだろうか。あるいは政弘句が肖柏句に差し替えられた可能性もあるかもしれないが、ともかく編纂のある段階まで、51・52がこの場所に配列されていたことは確かであろう。

一方これらを切り出す替わりに切り入れられた可能性の高い一四六一、二だが、そのことを確認するために前後の句と共に摘出してみよう。

恨ある人やわすれてまたるらん　一四五九

権大僧都心敬

おもひすつれは雨のゆふくれ　一四六〇

なにをたよりに人を待らむ　一四六一

多々良政弘朝臣

たのめしはおもひいつとも雨の暮　一四六二

ひとりなかむる春そさひしき　一四六三

従一位富子

たのめてもとはれぬ花の夕露に　一四六四

一四六〇は恨恋と待恋を繋ぐ役割を果たしており重要な句であると言えるが、この付合と政弘の付合とは、「人」「待つ」、「おもひ」「雨」「暮」等の語がうるさいほどに重複しており、付句の句意も雨の為に恋しい人がこれないとする等、類似性がやや気になるところである。一方一四六二と一四六四は「頼む」の語が共通しており、自然な並びになっているようではある。断定はむずかしいが、句の配列からもこの政弘句が補入されたと考えることも許されるのではないだろうか。

小さな本文異同はあっても、全体的に実隆筆本と近い本文を持つにも拘わらず、句の有無についての小さからぬ異同を有しているという事実は、本書の性格を考える上で極めて重要な問題であることは疑いないのである。

四　その成立過程

巻子装という権威ある装訂でありながら、奏覧本の本文とは重大な差異を有する存在。これが本書の性格なのであるが、その様な存在はどの様な過程を経て成立するのであろうか。

政弘句のみの抄出で巻子装であるという事実は、繰り返しになるが、やはりこれが政弘かその遺族・子孫に進ずるために作られたと考えるのが自然であろう。それが奏覧本の本文と違う点があるというのだから、奏覧本を利用して抄出がなされたのではなく、それ以前の草稿的な本文を母体にして作成されたと考えざるをえないのである。

そこで問題となるのは、なぜその様な未完成な時点で抄出をしなければならなかったのかということであろう。自ずと考えられる理由は、できるだけ早く政弘に入集の詳細を知らせたかったということに絞らざるをえないのではないだろうか。

ここで思い合わされるのが、先にも言及したように、『新撰

菟玖波集』の生みの親とも言うべき政弘が、その奏覧を見ずして他界したという事実である。猪苗代兼載が記した政弘追悼仮名記の『多々良政弘卿をいためる和歌辞』（別名「あしたの雲」）には、「明応四の年はじめの秋、いたづら事の侍るよしありしかば、残りのあつさをしやるかたなきころなれば、かくこそはとゆるび侍るほどに、日ごろふるまでをこたりがたく、日丶にをもりつ丶」（架蔵近世写本に濁点と読点を加えた）と、明応四年の七月頃より政弘の体調が悪化したことが記されている。

金子金治郎博士は『新撰菟玖波集の研究』（風間書房、昭44）において、兼載が政弘を見舞うために八月二十五日に山口に到着し、『新撰菟玖波集』の中書本と自身の書写本の二部を献じたことを、天理図書館に蔵される大永三年書写の『新撰菟玖波集』（れ二・一（一二））に存する、「此両冊上下以大内左京大夫政弘朝本（ママ）二／部一部中書奏覧本一部兼載自筆本遂書写校合依左金／吾為続御所望加同作者住（ママ）一冊奉／献者也／　明応五年丙辰六月廿三日　沙弥正任在判」との本奥書により指摘しておられる。確かに兼載が中書本を書写しうる立場にあったことは、書陵部蔵桂宮本の同集（三五三・七一）に存する対校本の本奥書に、「兼載自筆ノ本奥書」として、「此一冊依宗点懇望、奏覧已前書之／　明応四年暦林鐘中旬　兼載（花押写）」とあることからも明らかである。

大永三年本の本奥書に見える政弘所持本の二部は、書写校合に用いられていることからすると抄出本である可能性は低いと思われるが、諸状況から推測すると、政弘が重病であるとの報を得て、撰集完成の報告と共に政弘が気にしている違いない、その撰入句数と撰入句を伝えるべく、兼載が中書本から政弘句の抄出を行ったか、行わせたかした可能性は高いのではないだろうか。勿論それが兼載以外の宗祇や三条西実隆といった、編纂に何らかの関与をした人物が行う可能性もあるのであるが、本書の筆跡を見ると、宗祇や実隆の筆でも、彼らの書風を学んだ人物の手になるものでもないと思われる。もっとも、兼載筆とも断言できないのではあるが、その書風の共通性は明らかであり、弟子などの身近な人物に書かせた可能性を含めて、やはり政弘ととりわけ親しかった兼載が関与したものと考えて良いのではないかと思われるのである。また巻子本でありながら、既に指摘したように聊か急いで書いた印象があるのも、そうした状況下での作業を考えれば納得しやすくもあるであろう。

本書が有する形態並びに本文の特徴から導き出される、その制作の理由とは大凡以上のようなものになるのであるが、ここ

にも大きな問題が存しているのである。兼載が政弘句の抄出に利用した本は、当然兼載の手元にあった中書段階の伝本であったと考えられる。ところが、その本を対校本として用いている、先に言及した天理図書館大永三年本や桂宮蔵本には、本抄出本で確認できる異同を示す注記などは存在しないのである。

そうであるならば、この抄出は編集作業が一応終わって、中書本が制作されるまでの間の本、つまりは草案本を基に、政弘に入集句を速報する為に制作されたとでも考えなければ、この様な状態の抄出本文は生まれ得ないことになるであろう。『実隆公記』により、「連哥集」が「大概続終」った、つまり編纂がほぼ完成したのが明応四年五月二十六日のことであり、「草案出現」は六月二日で、中書の作成が兼載に命ぜられたのが同六日のことであることが判明する。公助僧正・行二法師そして兼載が分担書写した中書が実隆の許に届くのが二十一日である。それに先立って六月中旬には兼載が草案を書写していることは桂宮本の本奥書に見えた通りである。集号が「新撰菟玖波集」に決したのが六月五日であってみれば、抄出はそれ以降であることになり、また桂宮本が正しく兼載の六月中旬書写本の姿を伝えているのならば、それ以前ということになる。可能性としては六月十日前後の十日間程に絞りこめるのだが、この間に宗祇の了解のもとに政弘句の切り継ぎ作業が行われたと考えるのもいささか難しいようにも思われるのである。

従来、金子金治郎氏『新撰菟玖波集の研究』等により、金刀比羅図書館蔵の明応九年奥書本や天理図書館蔵御巫本（明応四年九月写）、鶴岡八幡宮蔵本に本能寺蔵本等は、本文の特徴などからして草案本系の伝本とされてきたのだが、これらには句の欠脱はあっても他の伝本に見えない句は確認出来ないことからすると、本抄出本との関連性は見出しがたく、本当に草案の姿を伝えると考えてよいのかも改めて問題になってくるのである。

それのみならず、草案本と奏覧本の中間的な存在とされている、大永三年本や桂宮本が校合によりどの程度忠実に兼載が関与した中書本の本文を伝えているかという問題も不確定な要素が多いと言えそうである。本抄出が伝える切り継ぎの問題は、『新撰菟玖波集』の成立過程と諸伝本の位置づけの総合的な再検討を要請しているのである。

おわりに

その装訂から資料性の高さが期待できる、早稲田大学図書館蔵の『新撰菟玖波集』一軸を取り上げて、その形態と本文の特性を検討して、既知の資料では知ることのできなかった、『新撰菟玖波集』編纂過程における句の差し替えの事実が明らかになった。それが編纂のどの時点でなされたのかを確定することは出来なかったが、その事実がこれまで蓄積されてきた『新撰菟玖波集』の系統分類の位置付けの再検討をも要する可能性のある問題であることは確認することが出来たものと考える。今後に近世写本を含めて、巻第八に「たのめしはおもひいつとも雨の暮／ひとりなかむる春そさひしき」の付合が無く、「文にむかへるともし火のもと／をとつれにとはれぬ夜はをなくさめて」が存する伝本を見出すことができれば、この難問の解明も大きく前進する可能性が高いであろう。

今はその余裕も見通しもないが、とりあえずは当初の目的であった、書物の形態に着目することで本文研究における重要な手掛かりを得られることがあることを、前稿に引き続き証明することができたのではないだろうか。

当初からの巻子装伝本を有する日本の古典文学作品は多くはないが、古筆切資料であっても、字配りや巻皺等から切断前は巻子装であったと判るものも少なくはない。そうした断片的な資料にも注目しつつ、今後も書物の形態と本文との関連性に着目した研究を続けて行きたい。

《附記》 本稿の執筆にあたって、貴重な資料の閲覧と、その翻刻と図版掲載を御許可下さった早稲田大学中央図書館と御担当の皆様に篤く御礼申し上げます。

【翻刻】

凡例

一、本翻刻は早稲田大学図書館蔵『新撰菟玖波集』一軸（文庫二〇・一一）を底本として作成したものである。

一、翻字については、「歌」と「哥」を区別するなど原本のおもかげをとどめるようにした点もあるが、漢字の字体に付いてはおおむね現今通行の字体に統一した。

一、翻字の改行や書き出しの位置はなるべく底本のままとし、紙継の箇所には「|」記号を付した。

一、句には上部に通し番号を、下部に『新撰菟玖波集』の句番号を付した。

一、底本は百二十八句より後の十二句分の本文を欠くと考えられるので、その部分を波線以下に『天理図書館善本叢書和書之部第二十巻 新撰菟玖波集 実隆本』（八木書店、昭50）を用いて補った。猶これらの部分には上部の通し番号は付していない。

新撰菟玖波集巻第一

春連歌上

1　み山のかけの春のさひしさ　二九

多々良政弘朝臣

2　鶯の人くとつくる人はこて　三〇

3　かへらはさくらうらみもやせむ　八九

4　ふる郷と都をおもへ春のかり　九〇

5　あふうれしさの春はきにけり　一一一

6　うへし時まちとをなりし花開て　一一二

春連哥下

7　おもはぬつてに心のへけり　二五三

8　ときは山あらしによその花をみて　二五四

9　忘ぬはおほろ月夜のなこりにて　三二九

10　あけゆくかねに花おつるやま　三三〇

11　はなれかたきはましはりの中　四一五

12　折わひぬはふ木あまたの藤の花　四一六

夏連哥

13　きくにむかしそこひしかりける　四九一

14　橘もかほるゆふへのほと、きす」　四九二

15 霞をよそに見するをちかた　五一一
16 かやりたく夕の月はおほろにて　五二二
17 ひとつふたつ花の夕貝顕て　五二七
18 たそかれ時にほたるとふかけ　五二八
19 うすきたもとに風しほる比　五六三
20 なくせみのは山かすその夕すゝみ　五六四

秋連哥上

21 風たにもまたそれとなき秋はきて　五九一
22 荻のは山にうすき三日月　五九二
23 山のはに秋のおもひの色そひて　七〇三
24 夕の雲にかりの一つら　七〇四
25 いつくのかねそほのかなる声　八一一
26 月見れはおほえす夜半や深ぬらん　八一二

秋連哥下

27 おもひもかけぬこすのおもかけ　八九三
28 野分せし今朝はいつくもあらはにて　八九四
29 駒をとむれは雁のなく声　九五〇
30 くれわたる日のくま河の秋の雲　九五一
31 おもふもさひし夕くれの空　一〇六〇
32 よな〳〵の月まちとをに秋ふけて　一〇六一

冬連哥

33 松杉たかきかけのさひしさ　一一六八
34 ふかき夜のみ山の霜に月落て　一一六九
35 人はしつかに冬こもるさと　一二四〇
36 薪こるをの、ひゝきに嶺さえて　一二四一
37 人にゆるさぬ心なりけり　一二六二
38 あら鷹のねふるまもなき夜比へて　一二六三
39 た、行水のあはれかす〳〵　一二八〇
40 かへりこぬとしをおもへは又くれて　一二八一

賀連哥

41 ぬる人もなき山のかりふし　一三〇〇
42 君か代にさゝぬ関の戸よる越て　一三〇一

哀傷

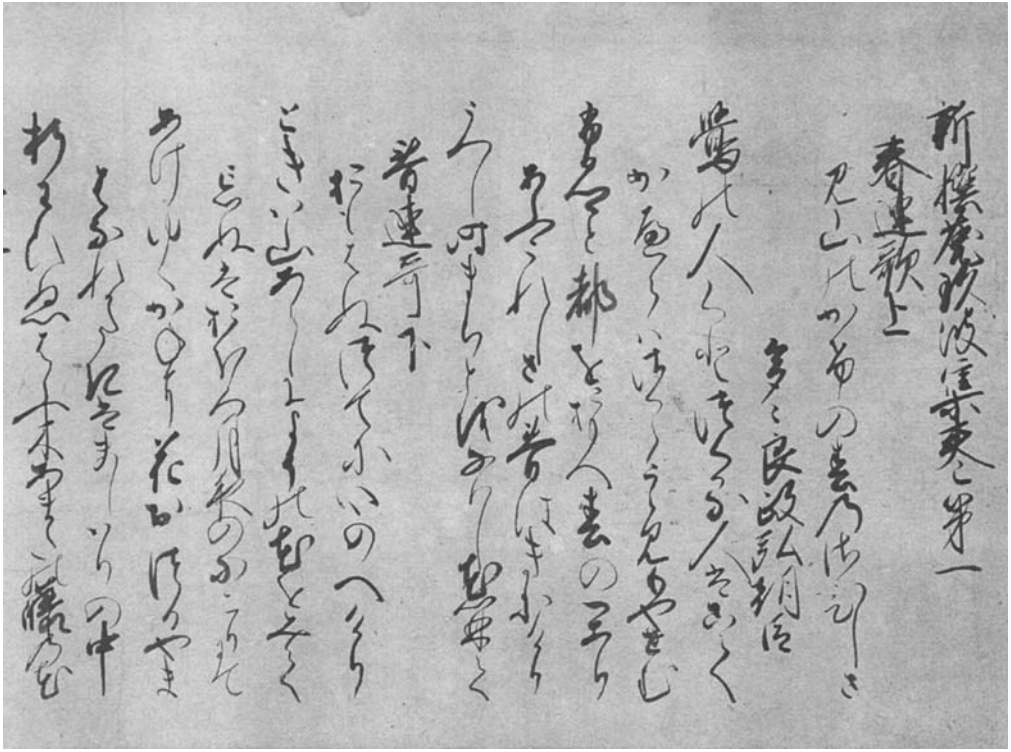
43 つゐにはおつる涙なりけり　一三四六
44 千世ませといのりし人も夢にゝて　一三四七
慈照院入道贈大政大臣薨し侍し年になむありける
45 しはしやすらふ松の下かけ　一三八八
46 ぬししらぬあはれをおもふつかふりて　一三八九

恋連哥上

47 うきたるこゝろゆくかたもなし　一四五一
48 宿をさへをしへぬはかりうき中に　一四五二
49 人こそはかはりゆくとも待てみん　一四七五
50 こぬ夕くれの山のはの月　一四七六
51 文にむかへるともし火のもと　ナシ
52 をとつれにとはれぬ夜はをなくさめて」　ナシ
53 おもふとしらぬ人はうらめし　一五四五
54 さきの世にわれやつれなく過つらん　一五四六
55 さもあちきなくなみた落けり　一五七五
56 又とはむけしきも見えぬきぬ〳〵に　一五七六
恋連哥中
57 手にもたまらぬ中そかなしき　一七三七
58 ひろひをきて涙の玉は見せまほし　一七三八
59 すかたよいかにさよ風の声　一七五七
60 槙の戸をたゝくとおもふ夢さめて　一七五八
61 恨ても世はあたなるになくさめよ　一七九七
62 よし恋しなむ人もいつまて　一七九八
恋連哥下
63 我はひとりの秋のかなしさ　一九六三
64 こよひ月たか手枕にはれぬらん　一九六四
65 わかうたかひもことはりの中　一九七三
66 月にこそしのひし雨のそらたのめ　一九七四
67 あまの袖しのうら風そふく　二〇八六
68 もにすまぬわれから身をやしほるらん　二〇八七
羇旅連歌上
69 世もかこたれぬ旅のかなしさ　二一三四
70 故郷を人やりならすすみすて、　二一三五
71 すゑにそさとをけふ三日のはら」　二一七八
72 宿もなし衣かせ山ひと夜ねん　二一七九
73 旅は中〳〵うきこともなし　二二三二
74 心をもとゝめぬかりの宿にねて　二二三三
75 夢よりのちのふくるよの空　二二四六
76 行つかれ夕まとひする草枕　二二四七
77 かねに立よる夜るの山寺　二二八二
78 月に行秋の旅人やともなし　二二八三
羇旅連哥下
79 ふる郷におもへはいかてのこるらん　二三二二
80 たひゆく人のとをきおもかけ　二三二三

81 心と、めてをくるたまつさ　二三三四
82 たまさかのたよりうれしき旅の道　二三三五
83 宿をや月のいて、とはまし　二三七二
84 くらき夜のうきねかなしきとまり舩　二三七三
雑連歌一
85 ふきおろすひら山風に花ちりて　二四八〇
86 小松にうすき春のあは雪　二四八一
87 た、さひしさの山さとの春　二四九二
88 花はまたさかぬ霞に雨おちて　二四九三
89 むすふか袖の露のしら玉　二五九〇
90 世のうきをなにそと、へは秋のきて　二五九一
91 はちすのうへをねかふかの国」　二六四八
92 人の世のにこりにしまぬ月をみて　二六四九
93 か、れとてたれかす、めし物おもひ　二六五四
94 はしめはいつそ秋のゆふくれ　二六五五
雑連哥二
95 あらはすもかくすも法の外ならて　二七一〇
96 雲よりうへにたかき大比え　二七一一
97 いつより玉の砌とはすむ　二七七六
98 なにはつのむかしを民や忍ふらむ　二七七七
99 いまそ心のまことをもしる　二八三八
100 あらましはたのまさりつる柴の戸に　二八三九
雑連歌三
101 おとろく人もまれの世中　二八八二
102 あたなるをたゝさく花のうへに見て　二八八三
103 なれぬれは心のにぬも友なれや　二九一〇
104 むかへる窓になをきくれ竹　二九一一
105 にたれともにぬ事おほくあるものを　二九四六
106 にほひをくる、筆のうつし絵　二九四七
107 おもへは口のとかもあらしな　二九五四
108 のむ酒の後はわれかの心にて　二九五五
雑連歌四
109 さそなすかたもかはり行らん　三〇九三
110 住なれて声ひなひたる都人」　三〇九四
111 またのこりある秋のよの空　三一〇一
112 まとろめは見はてぬ夢の又とひて　三一〇二
113 何にか春の色をのこさむ　三一二七
114 時わかぬ霞は老のなみたにて　三一二八

115 みる夢よりもうつゝはかなし　三一九三
116 たゝよひて身をうき橋の早瀬川　三一九四
雑連哥五
117 生きてわかすめるこの国　三二八七
118 なに事もよしあしはらのかりの世に　三二八八
119 あらましにのみ又もすきけり　三三〇一
120 後の世をたゝことくさにうちわひて　三三〇二
121 かりそめにみるをうらやむ柴の庵　三三五五
122 すてはうき世を又やしのはむ　三三五六
神祇連哥
123 かみのやしろにたかき松杉　三四六三
124 かけそふるみしめはいのるしるしにて（巻頭）　三四六四
125 たゝ直なるを心とも見よ　三五〇五
126 ありなしもしらぬは神のかたちにて　三五〇六
釈教
127 又かへしてそまことをもとふ　三五三五
128 法師はふかきをしへやのこすらん」　三五三六
師のをしへをはたれにつたへん　三五七七
身は老てひとりおこなふ山のおく　三五七八
発句上
春ふるは雪さへかすむたかねかな　三六〇六
花そ梅にほひはもるゝ木ゝもなし　三六一七
落花の発句に
ちるやうきしらぬは花のこゝろかな　三六七二
ふけや猶ちかまさりするあきの風　三七二八
発句下
月は秋あきはこよひの一夜かな　三七六四
なく鹿の声も色なる時雨かな　三七九四
雪ふかき道とてかへる秋もかな　三七九七
神無月の比の連歌に
秋は猶すゝきにのこるかれ野哉　三八〇六
雪も猶うつまぬ山のすかたかな　三八四〇
よしや春一はなさけるやとの梅　三八四五



図版　早稲田大学図書館蔵『新撰菟玖波集』巻首